

# 阿波の襖からくり研究—犬飼農村舞台・西祖谷山村舞台—

研究年度・期間：平成 26 年度

研究ディレクター：絹谷 幸二  
(美術学科教授)

共同研究者：井関 和代 (工芸学科教授)	池田 光恵 (芸術計画学科教授)	伊藤 正博 (教養課程准教授)	岩崎富士男 (放送学科学科長)	江尻 幹子 (デザイン学科教授)
奥田 基之 (写真学科専任講師)	織作 峰子 (写真学科学科長)	加治 大輔 (建築学科准教授)	芹澤 尚子 (音楽学科教授)	高岡 一弥 (写真学科客員教授)
高橋 善丸 (デザイン学科学科長)	田之頭一知 (教養課程准教授)	坪田 政彦 (美術学科教授)	豊原 正智 (芸術計画学科教授)	中川 滋弘 (映像学科教授)
永坂 嘉光 (写真学科教授)	浜畑 賢吉 (舞台芸術学科学科長)	福原 成雄 (建築学科教授)	山本 健翔 (舞台芸術学科准教授)	(職種は平成 26 年度現在)

阿波三村の「襖からくり」は、徳島の奥深き山村にあって、古きより村人によって受け継がれてきた伝統芸能で、五穀豊穡を願うとともに村々の人々にとっての娯楽として、毎年、年に一度行われている。この「襖からくり」は、人形芝居の舞台等の奥に設けられた高座に組み込んだ襖を巧みに操作して、舞台背景を一瞬に転換させ、演出する習俗である。類似技法は日本各地の農村舞台でもみられるが、多くが歌舞伎使用のものであるのに対して、阿波農村舞台では、阿波人形浄瑠璃のためのものであり、「襖からくり」が独立した演目として行われ、独自の素朴で華麗な世界を創りだしている。

徳島人ですらあまり知られていないこの「襖からくり」を調査・研究し、大阪芸術大学の参加・協力によるより楽しい芸能空間を演出し提供すること、新作「襖からくり」の創作によるその新たな可能性を試みること、大学と村々の人々とのコラボレーションにより、文化交流と地域との共感・融合を計ること、さらには、芸大の学生及び若い人々に、日本の豊かな自然の中での素朴で鮮やかな意匠のエンターテイメントに参加し、観る機会を提供することが本研究の目的であった。

本研究は、今日、日本人にとって「ふすま」とは何か、暮らしの中の「アート」とは、「芸能」とは何か、文化装置としての「ふすま」とは何か、急速にデジタル化が進む現代社会の中で改めて日本人にとっての創作のアイデンティティについての手がかりを得ることができ、また、大阪芸術大学という総合芸術大学にとって、新しい視点で様々なものを見つけ出し、検証し、再編集し、表現し、具体化することを通して世界に発信する装置を用意するスキルを生み出すことが期待される。「襖からくり」を通して、阿波の村々から、大阪芸術大学から社会に向けて、日本に向けて研究の成果を発信する機会が得られるということに、本研究の学術的また社会的意義が存在する。

本研究は、すでに前年度から数回にわたり現地に赴き予備調査を行ってきた。それに基づき、徳島市八多町の犬飼農村舞台、三好市西祖谷の山村舞台の2カ所で新作「襖からくり」を実施することにした。この調査・研究・実施には13学科の教員、大学院生、学部生が関わっており、調査、襖制作、公演実施がそれぞれ分担して行われた。本年度の実際の調査は5月31日、6月1日、9月13日、10月4日の4回に亘って行われ、建築学科による舞台の実測、襖制作に関わるデザイン・美術・工芸・写真の各学科による襖操作の確認、現地スタッフの指導受講、舞台芸術学科によるパフォーマンス、妖怪マスク等のための調査がなされた。それらの調査資料に基づいて、襖操作の練習のために、実際に8メートルにおよぶ棧とレールが1基のみだが、木工室の協力の下、藝術研究所のスタッフによって制作され、10月23日から3日間、芸術計画学科スタジオにおいて、本番通りのシナリオに基づく練習が行われた。これは、一部の限られた装置によるシミュレーションであったが、問題点が明らかになり、実際の操作感覚も得られて本番に向けて非常に有効であった。

今回の「襖からくり」全体の構成は、音楽学科、放送学科による作詞・作曲の歌、音楽、音響効果を加え、デザイン・美術・工芸・写真の各学科の制作による三つのパートからなる襖からくりをメインに、シナリオに基づく舞台芸術学科による講談調の語りとパフォーマンス、さらに一部、芸大の大道芸同好会によるジャグリングをも含めた大掛かりな総合芸術作品となった。

まず、犬飼農村舞台での公演が11月1日午後4時30分から6時まで行われた。襖設営とリハーサルを含め、現地のベテランの襖からくり関係者に大いに手伝ってもらい、本番では雨に見舞われながらも、50人ほどの観客の前で成功裏に公演を終えることができた。この最初の経験が2日目の西祖谷での公演に生かされることになった。

西祖谷での公演は、11月2日夜、犬飼とは少し襖の構成を変えて行われた。それは、レーンおよび1レーンの襖の数が犬飼とは異なるためである。犬飼とは違って西祖谷の徳善阿弥陀堂での公演は、薪による篝火によって照らされた夜7時から8時30分までの公演で、幽玄漂う雰囲気の中、雨にも見舞われず、犬飼を上回る観客を迎えて行われることになった。ここでも現地のスタッフの方々に大変お世話になった。リハーサルで襖の滑りがうまくいかず、その場で大工道具を持ち出して修正してもらうなど、臨機応変に、また機敏に対応してもらい、われわれに対する協力の力の入れように感服した。一部トラブルがあったが、全体として成功した公演であった。

犬飼農村舞台、西祖谷山村舞台での大阪芸術大学による新作「襖からくり」は、当地以外のしかも芸術大学の本格的な創作による総合芸術として、今回が初めてのことであり、メディア、特に朝日新聞、徳島新聞、徳島放送、現地のケーブルテレビ等で記事としてまたオンエアされ、関心の高さが窺えた。このことに関しては12月の教授会の場をかりて、一部報告がなされた。

今回の藝術研究所の研究補助費による共同研究・制作「阿波の襖からくり研究」は、「文化交流と地域との共感・融合を計ること、さらには、芸大の学生及び若い人々に、日本の豊かな自然の中での素朴で鮮やかな意匠のエンターテイメントに参加し、観る機会の場を提供するこ

と」という研究目的を掲げて行われたが、学生たちへのインタビューでも窺えるように、貴重な経験と試みであり、一定の所期の目的を達成できたのではないだろうか。特に、三好市の観光協会からは、非常に好評であったということで、次年度も協力をお願いしたいという意向が伝えられている。

この共同研究の報告書は、現在編集作業が進んでおり、夏前には発行される予定である。また次年度後期に教員研究発表会にて研究発表並びにシンポジウムを予定している。

(文責 豊原正智)



リハーサル

犬飼

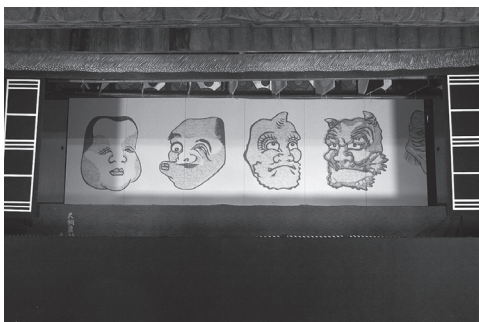
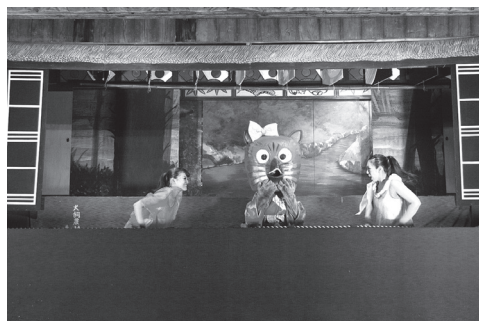
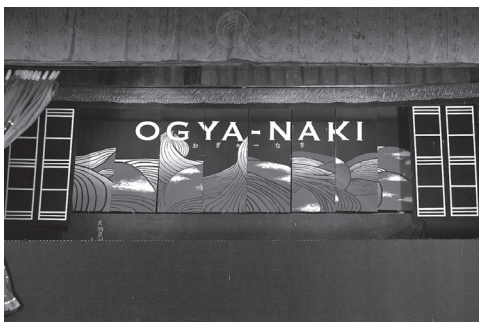


徳善

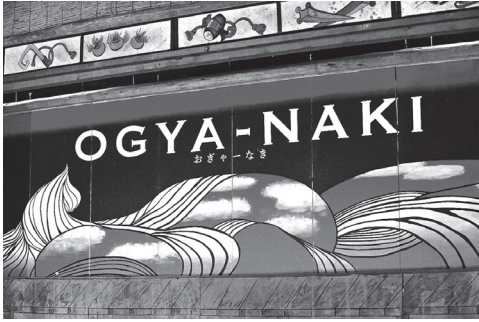


本番

犬飼



本 番  
徳善





## 「阿波の襖からくり担当一覧」

監 修		
絹谷 幸二	美術	教授

企画製作		
高岡 一彌	写真	客員教授

総監督		
豊原 正智	芸術計画	教授

調査		
福原 成雄	環境デザイン	教授
加治 大輔	建築	准教授
堀川 孟史	環境デザイン	副手
千葉 ほのか	舞台芸術	2 回生

襖制作		
織作 峰子	写真	教授
永坂 嘉光	写真	教授
坪田 政彦	美術	教授
江尻 幹子	デザイン	教授
高橋 善丸	デザイン	教授
井関 和代	工芸学科	教授
佐々木 淳一	工芸学科	非常勤講師
小原 直	写真	客員准教授
藤田 裕貴	デザイン	副手
滝沢 仁悟	芸術計画	副手
藤中 星歩	藝術研究所	アルバイト
金田 祥太郎	藝術研究所	アルバイト
今野 きさら	藝術研究所	アルバイト

川西 史華	写真	院生
紺田 達也	写真	院生
藪口 雄也	写真	院生
石黒 悠	写真	4 回生
只野 寛亨	写真	4 回生
舘 かほる	写真	4 回生
辻 七瀬	写真	4 回生
杉本 光輝	写真	4 回生
樋口 貴哲	写真	4 回生
松本 尚大	写真	4 回生
陶器 浩平	写真	4 回生
中村 公美	美術	4 回生
岡本 鈴果	美術	4 回生
中尾 舜	デザイン	4 回生
浜崎 翔	デザイン	4 回生
松田 雄亮	写真	3 回生
金子 恵子	写真	3 回生
小山 慎太郎	写真	3 回生
下久 菜津美	写真	3 回生
山田 智也	写真	3 回生
谷山 胡桃	デザイン	3 回生
秋山 大樹	デザイン	3 回生
許 家豪	デザイン	3 回生
堀 俊樹	デザイン	3 回生
土屋 恵里佳	デザイン	3 回生
湯浅 立靖	デザイン	2 回生
和田 一馬	デザイン	2 回生
河合 百合子	工芸学科	2 回生
木林 由依	工芸学科	2 回生
木村 鶴夕花	工芸学科	2 回生
京極 郁穂	工芸学科	2 回生

小原 瑠夏	工芸学科	2 回生
松下 睦実	工芸学科	2 回生
米田 万結子	工芸学科	2 回生
渡邊 愛	工芸学科	2 回生

襖操作		
池田 光恵	芸術計画	教授
高橋 聡	デザイン	副手
北山 結菜	演奏学科	4 回生
谷山 胡桃	デザイン	3 回生
山口 詩織	デザイン	3 回生
矢倉 晶子	デザイン	3 回生
馬籠 優輔	デザイン	3 回生
太田 美波	デザイン	2 回生
小林 真由美	デザイン	2 回生
増田 由莉香	デザイン	1 回生

衣装制作		
中谷 友机子	工芸学科	非常勤講師

妖怪マスク制作		
末延 國康	初等芸術	非常勤講師

シナリオ		
浜畑 賢吉	舞台芸術	教授
江尻 幹子	デザイン	教授
石川 梓	文芸	院生

舞台		
浜畑 賢吉	舞台芸術	教授
山本 健翔	舞台芸術	准教授

嵯峨根 結実	舞台芸術	副手
永井 宏平	舞台芸術	副手
津田 美子	舞台芸術	卒業生
山下 雅	舞台芸術	卒業生
山崎 永莉	舞台芸術	卒業生
塩崎 彩巴	舞台芸術	卒業生
佐藤 ゆみ	舞台芸術	卒業生（語り）
森田 康平	舞台芸術	4 回生
近藤 一輝	舞台芸術	3 回生
木村 周平	舞台芸術	3 回生
森田 亜衣	舞台芸術	3 回生
中野 史緒江	舞台芸術	3 回生
森 彩香	舞台芸術	3 回生（歌）

作詞・作曲・音響		
岩崎 富士男	放送	教授
芹澤 尚子	音楽	教授
牛山 泰良	音楽	副手
元井 奈美	音楽	4 回生
荒井 卓也	音楽	3 回生
谷口 一平	音楽	3 回生
松尾 朋拓	音楽	2 回生
杉本 ひかる	舞台芸術（音楽）	2 回生
富江 梨穂	舞台芸術（音楽）	2 回生

ジャグリング		
今井 奏夢	舞台芸術	4 回生
隅 ほなみ	デザイン	4 回生
江崎 遥	放送	4 回生

記録映像・写真		
中川 滋弘	映像学科	教授
安井 弘幸	映像学科	副手
宮崎 佑介	映像学科	機材係
神尾 康孝	写真	助手
田中 圭祐	写真	助手
陶器 浩平	写真	4 回生
松田 雄亮	写真	3 回生

報告書		
伊藤 正博	教養課程	准教授
田之頭 一知	教養課程	准教授

総合マネージャー		
松下 陽子	藝術研究所	課長

教授 15 名 准教授 4 名 非常勤講師 3 名 客員教授 1 名 客員准教授 1 名 副手 9 名 事務職 1 名 アルバイト 4 名 卒業生 5 名 院生 4 名 在校生 55 名
総 102 名

M 5 妖精達の踊り（この間に転換）

ふすまⅢが終わる。

ふすまⅢが出来上がったところで、妖精たちは消える。

ひだる神

ひだるいよ。腹が減ったよ。おやここに倒れているのは学生か。

随分痩せているが、まあ我慢してこいつを食おう。

狂言師

ここ祖谷溪に遙か昔から住まい居る妖怪は、もう住む場所ももうなつて、現世に現れたところで人間に悪さをする力を失ってしまった。

さあ祖谷溪の妖怪たちよ、お前たちが大好きな山の峰、木の祠、沼の底深くで静かな眠りにつくがよい。

後は現世に生きる人間たちに任せようではないか。

学生に近づくと、そこへ婆が出てくる。

狂言師去って行ってフィナーレ。

狂言師

これヒダル神よ。あまり卑しゆうするものではない。この握り飯を与うるによつて早う山へ帰るがよい。

M i ひだるこいうた

ひだる神は握り飯を食いながら去っていく。学生眠りから覚めたように伸びをして起き上がる。

歌が終わったらこの曲のアレンジで全員出て来てのダンス。

学生

ああ、お婆さん、北斎先生の漫画、見てくれましたか？

狂言師

おお、見たとも。この祖谷溪の妖怪に似たものもあり、似ておらぬ妖怪もあるのお。

ふすまⅢが始まる。（BGM・例えば阿波踊り）

襖の絵は現代の家族3世代の写真と、北斎漫画の妖怪が現われる。

学生は小屋をひと回りして上手前に出てくる。その間「重い、重い・・・」とぼやいている。ふと気付いて触ってみると、赤子は石に代わっているではないか。驚いて振り落とすと、こなき爺は学生の足にしがみつく。もだえる学生。「抱いてくれ、おんぶしてくれ」という爺。

### M3 屁こき爺

そこへ音楽が入る。客席下手から屁こき爺の登場。学生は臭い屁に悶絶してしまう。こなき爺もたまらず逃げて行く。勝ち誇るへこきは、倒れている学生や客席に向けて連発する。

そこへ後をつけて来たのか下手から河童が現れる。

狂言師

河童は人を水底に引きずり込みその尻小玉を抜き取る妖怪じゃよって、へこきの尻を狙って現れたものでござる。

河童

やや、屁こき爺だな。奴の尻子玉はさぞかしでかいだろう。ちよつと臭いが我慢をして食うてやろうか。

河童が尻子玉を狙う度に屁こきは悲鳴をあげ、ついには逃げ去ってしまふ。

河童

やれやれ屁こき爺め逃げおったか。はてここに倒れておるのは、どこやらの学生だな。ようししからばこやつ尻子玉を抜いて今夜の飯としよう。

河童がそつと近づき今度はその尻子玉を狙う。危うしと思ったその時一陣の風の音。天狗が団扇で煽きながら現れる。

### BGM (風の音)

河童

これはたまらぬ風じゃ、お皿が乾く！（と逃げて行く）

天狗

どうじゃ河童め、わしの力を思い知ったか。

### M4 怪しげな音楽

美しい女（妖精）が現れる。天狗はすぐにデレデレになってしまふ。

二人のダンス。やがて女は天狗を小屋奥へと誘って行く。天狗がついて行くと、ふつと女が消える。天狗は奥へ追いかける。女の代わりに出てきたのは狸。

狸

いかにわれの腕前この変身の術、見事天狗の奴を騙してやったぜ。

そこへひだる神「ひだるいよ、何か食いたいよう・・・」と言いながら登場。タヌキを見つける。

ひだる神

おう狸がおる。あれを捕まえて狸汁にしよう。

狸

わあ、ひだる神だ。こいつは食えるものなら何でも食うてしまふ恐ろしい奴だ。食われてなるものか。

ひだる神

逃げるな狸。助けると思つてわしに食われてくれえ。

狸

いやだ、いやだ、食われるのはごめんだ。

狸はたまらずに逃げていく。ヒダルが追いかけようとすると、女の妖精数人が出てきて踊る。ヒダルは巻き込まれる。

ました。若者はそこに向かって威勢よく走り、川のほとりにたどり着くと滝が見えました。激しい滝の音を聞いていると、その音の中に何か別の音がふいに聞こえてきました。よく耳を澄ましてみると、おぎやあ、おぎやあという赤子の鳴き声でした。

若者がその鳴き声を居って行くと、そこには白い布に包まれた赤子がおりました。ところどころ、泥がついておりましたので、男は、丁寧に泥をはらってやりました。

ふと気づくと川のほとりに純白のドレスを着た美しい女がおりました。若者はまだおぎやあ、おぎやあと泣いている赤子を見捨ててその女のもとへと行ってしまいました。

#### 第四場面

まわりは一瞬で、純白の背景になりました。森も草も見えなくなつて、川だけが残っておりまして。汚れない青々とした美しい色でした。すでに夜明けになっており、辺りは目が痛いほどに明るくなりました。若者は先ほどまで夜だったはずなのに、なぜ急に朝になっていたのか不思議に思いました。白いドレスの女は微笑んでいるだけで何も言いませんでした。その横顔があまりに美しかったので、若者はその女に触れてみたいと思ひ、近づいて手を伸ばしました。その途端に若者はひゆる、ひゆると落下して行つたのです。

#### 第五場面

若者は一人暗闇の世界におりました。あの純白の女はどこに行つたのでしょうか。「あれは化け狸であり、あの老婆だったのか。ここは冥土であり、俺は今三途の川を渡つてしまつたか」と考えました。

その時不思議なことに今まで忘れていたあの赤子が頭をよぎつたのです。そして、赤子を見捨ててはいけなかつたと思つた次の瞬間、赤子が目の前に出て来たので思わず若者は抱きしめました。

するとそこに、おぼろげに見える細い糸が伸びてきました。若者は赤子を抱いたままゆつくりとその糸を登って行つたのです。

#### 第六場面

どこからか寺の鐘の音が聞こえてきました。若者の眼には生まれ育つた祖谷の里の懐かしい家々が見えました。気が付くと抱いていた赤子の姿がありません。

おぎやあなきは妖怪でしたが、その子を抱き上げた人間に幸せが訪れるという言い伝えがあるのです。

若者はそつと「俺は妖怪のおぎやあなきにたすけられたのか！」と、呟くのでした。

ふすまⅠが終わる。

#### M2 ジャグリグ

ジャグリグメンバーの登場。その間に転換。

ジャグリグは終わると退場。

上手前でずっと見ていた学生は立ち上がり、下手に歩き始めると赤子の泣き声。立ち止まり探すと小屋の中に見つかる。それを抱えあげあやす。そして人里である下手奥に入つて行く。

「ふすまⅡ」始まる。

#### 狂言師

この赤子は子供がなくすなわちこなきと申す妖怪の爺で、「抱いてくれ、おんぶしてくれ」とせがみ、やがて重たい石になって人間にしがみついて来る厄介な妖怪にござる。

#### BGM



「ふすまー」(ナレーションあり)

おぎやーなき

### 第一場面

昔、こゝ祖谷溪に住む若者が山道を歩いていると、どこからか赤子の鳴き声が聞こえて来ました。薄気味悪いとは思いましたが恐る恐るその声をたどって行きました。ところがそこにいたのは赤子ではなく体の小さなただの爺さんでした。

こなきじじい 「そこを通りよる、あんにやん、ちよつとわしをおぶつてくれんかのう」

若者は爺さんを哀れに思い、おんぶをしてやったのです。しばらく山道を歩むうちに爺さんの体重が徐々に重くなっていると感じ、後ろを向くと爺は笑ったまま石になつていてはありませんか。若者はこの爺さんが村の古老から聞いていた妖怪こなき爺だと気づき、ぎやあつ、と叫びながら爺さんを放り投げてしまつたのです。

逃げているうちにもう一人爺さんが現れて、尋常じゃない速さでおならをしながら迫ってきました。それは屁こき爺だったので。若者はびっくりして腰が抜ける程でした。

屁こき爺は若者に向けておならを放ち、森中がおならの海になって、一瞬で白色から黄色になつてしまいました。若者はあまりの臭さで涙目になり、こなき爺もまたあまりの臭さに耐えかね、どこかへ消えてしまいました。

### 第二場面

やがて空には満月が出て、月明かりの輝きに小さな小屋が照らされているのが見えました。若者は戸をとんとんと叩き、

芸大生 「す、すいません。ここで少し休ませてもらえないでしょうか」

するとぼさぼさ頭で、一本、一本のしわが針のように細く腰を丸くした老婆が出てきました。

老婆 「ええですよ。また、迷うた人が来た」

と、老婆はにやにやとほくそえんでおりました。

男はそれが不気味でたまらなかつたので、後ろを振り返って逃げ帰ろうとしましたが、森の奥は暗闇に包まれており結局小屋に上がらせてもらうことにしました。小屋の中には囲炉裏があり男が来るのがわかつていたかのように、温かい味噌汁や座布団が用意されておりました。男は老婆に、先ほど会つたこなき爺について語りだしました。

老婆 「こなき爺が赤子の格好をしとるつちゅうのは嘘言ですよ」

若者 「そうですか。僕はだまされたんですね」

と、男は苦笑しました。

老婆 「どれくらいここに住んでおられるんですか？」

老婆 「かれこれ一千年程じゃ」

若者 「なぜこんなところにおられるんですか？」

「もう人と会うのは好かんよう。もう知つとるかもしらんけど、ここは妖怪が住むと言われていてね。むしろ妖怪の方がいいことだつてある。人間は欲が深うて、妖怪と一緒に住んでいる方がまだええわ」

と、また、不気味な笑みを浮かべておりました。

### 第三場面

小屋の壁が強風でぎしぎしとうめき始めました。若者はその物音でおびえてしまいました。これは天狗の仕業だったようです。天狗は右から左へと巨大な団扇で仰ぎ、家を吹き飛ばしてしまいました。二人は必死に逃げまどい、無我夢中で走っていた男は老婆を見失ってしまいました。

喉が渇いた若者がさまよい歩いていると、どこからか水の匂いが漂つて来

## シナリオ

コンセプト・・・基本的に卒業生の狂言師が全体の解説をします。大阪芸大の学生が、祖谷溪周辺に残る「ふすまからくり」と、平家落人伝説、妖怪伝説に興味を持ってこの地を訪れたことから始まります。

M1 ひだるこいうた

ひだるいよ ひだるいよ  
恋はくせものあの人と  
誓った赤い糸切れて  
こころの闇の奥深く  
堕ち行く姿あわれなり  
定めなき身は世のならい

あいつが好きさあいつが嫌い  
次の世までも逢いたいよ  
こころうらはらひだるいよ  
なみだうらはらひだるいよ  
ひだるいよ ひだるいよ  
浮名を流した川ならば  
いっそ流れに身を任せ  
人目しの人だうたかたを  
浮かべたままの恋もよう  
恋の夢こそいとしけれ

あいつが憎いあいつが恋しい  
殺したいほど逢いたいよ  
いのちうらはらひだるいよ  
ことばうらはらひだるいよ

舞台下手より狂言師登場。舞台前中央にて。

狂言師

これはこの辺りに一千年住まい致す老婆にて候。この地祖谷溪には、昔源氏との戦に敗れ逃れ来たる平家の落人らの、恨みに満ちた霊が籠りおる。また巡礼の途次山道に迷い腹を空かせ、「ひだるい、ひだるい」とうめきながら死んでいった「ひだる神」の霊など、さまざま妖怪どもが静かに休み居る。

しかるに今に於った河内の国より大阪芸術大学の学生が、この地のふすまからくりと妖怪を調べんとやうて参ること。躍動する若き命の近づくを察してか、妖怪ども久々に目を覚まし、ザワザワと嬉しそうに蠢き出だしたるによつて、学生らに悪さをせぬようこの婆が妖怪どもを静めんとここに待ち構えたる次第。

客席奥中央より、学生北斎の画集を抱え、腹を空かせて辿り着く。

学生

あ、お婆さん地元の方ですか？ この辺りの妖怪に興味があつて、江戸時代の浮世絵師北斎先生が描かれた妖怪の漫画と見比べてみたくてやってきました。教えて頂けますか？

狂言師

招致いたしました。祖谷溪の妖怪の事なら何でも知っておるわい。見比べてやろう程に、まずはこの握り飯を喰うが良い。ひだるいのじゃろう、腹がなっておるわ。この辺りでは腹が減ることを「ひだるい」と申すのじゃ。

学生

有難うございます。いただきます。

狂言師退場する。

学生客席に背を向けて握り飯を食べ始める。ふすまからくりが始まる。